

8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5 6 7





古今和歌集卷第二十

大哥取御事

大直すかと。大内乃内教坊といふ所もあり。是を大哥
而とも女樂并舞娘の候ともいへ也。ともももくらを
あり。坊家乃別當らに并次滑りくさばへやうて舞
娘へも。うつゆき平。或太歌の清音としてあり矣
らまくちうり。風俗乃然をほくとじうれぢうり
おひるはひ乃事

大直自と云。内裏よりれぬやを直と云。白宮の宿主
もとたとうて大直自と云。大嘗會乃名也。帝王御
即位もとめよ詮ひますをすゑ地神武天皇より
里も一ちわぐ



まくらのまゝにあはれむ

月本紀より後ノ事ニシテめも代までよ

おまへはまの嫁よりくとておまへ
をきく。うははよせで。あはれにあはれにあと花をとすあ
をきくのまうりよ。ほんまあとて庭よくまるとほん
やうり。其の朝をも。左衛門乃傍さがもてあらてほも
座薦しゆせきをもとすも。あ
はあくも。拂佐乃始也。うぐいそ。
かくそをやうり
み後もあめ。大舜もよけくあまとつ
む。拂カキ薦カキとゆふ懲スキ戒シキ主ミ奉スルびく。ひくらまわだらやうり
然れど表乃山とく。大嘗去よひ山よつるとはまく
だの火人ヒトの火ヒとひく。たゞをひまかすからがく丹波タヌキ

ひまくもりあらむとくとくへ大嘗会乃事
とくあまことづゝ總代主其事乃御屏内にて左心
かく紀原事とよひ乃事

よまうてあ人の舞。事と。とくに意娘。とも
かの舞也。もう一乃。と。まひるや。落葉舞。さ
うも。涼よ。ちんの。く。うらまく。あそび。くらげをうへ
と。あ。あ。か。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。

ひきうちかくむをとへ。ひくへ大嘗会乃ふ
ときあまくさく。總地主墓乃御屏内とてたる
かみ紀原すとゆひ乃亨

ゆすとどもとゆふうとほ、もあらむ。撫活幕也
是ハ正月乃初卯日。御杖をもよこわを御杖とま
ごくももて事也。はるはるもよげ枝をさる
よくねくがよももくゆよげとてや。ひのる
をよみつ、よみつて天まで白きつらむすまわり

あふみより

曲字、絶句とよび。即ち純よ夷曲とちとひよびり。
よし曲ハ夷語り也。信ふ乃ゆうの度。是を信ふの
辞をてゆうてからくるとあることす。廢絶せざらん。
但モ後、大嘗会乃屏風によみ一ハコモヒタリ。を
一たうりよじせ始ももよづりとひだり。儀式集
をよみ歌セテもとくらかへゆくとひしても屏乃

出一あう節乃すぢう

あくまう物をくねもとひの聲よもよひくらぬいはむき
をくまう羽立くまもとひな聲よ因縁ひむき。このこと
ああねうとせ

水くみびう

ありハ風むりも

あくまう物をくねもとひの聲よもよひくらぬいはむき
水蓋の聲のうづの聲也。妹とあれと妹と妹と妹と朝の聲乃隣
をぬきいはせんとせんとせんとせんとせんとせんの上
よきくろ聲あり。妹とあれとハ妹と妹と云也。古うてハ
あれとあれとよめり。ねこの聲をハ妹とてもて也
あれとあれとよめり。あれとあれとよめり。せんとせんとせん
道を解く。おののあらうとひくとそまくけ何

きのまことひはくわむか。まよ氣十二
うをまねてのくわめがまくわゆじやも間も
一役重くよ妹と我とまくあくへうねい。まよううたれ
どもまくわせぬよくわゆ。お乃ありつも。山うき
もよくお乃ゆり博も乃役不無

ちもい山あり

山極山と云せらるふりか也

あらう山すくみまくまくひの山。まくわくまく一山
まくわくとうちもくくわく。まくひの山。極云小
あをあくけあく。あくすこよ

いも山すくみまくまく。まくひの山。極云小
まくひの山すくみまく。まくひの山。極云小

山極山と云せらるふりか也。山極山と云せらるふりか也。

あくすこよ

神あそひ八云、
かくくくくうううううううう。まくわくわくわくわく
りくわくわく

やうわく歌

やうものと、うううううううう。神乃まくがめをうる
神嘗よくうううううううう。まくわくわくわくわく
あり。まくうハ捨きよあくよ

作勢乃むほひ山のまくまく。神乃まくがめをうる
神のいまく山乃神乃まく。神乃まくへよもぐり。山うく
神をひひひひひ。山のまく。神乃まく。神乃まく。山うく

うめれあるがゆり。はあ、もうううう。神のむ
ほ、御ろをえ。おき乃もゆ乃くへ、神乃
まにゆきり。神乃もゑ乃くへり。はる山とのもんを
かうゆとをく。あらき神あとく。あらうす也
あやひとけとがきとぬ。神系乃あらきゆく。神乃くも
霜あまくひとけとも枯ぬ。うねるのく。あらきゆく
つま神れまひと。うねるのく。神を程ひもくたう
あやひ。おゆきゆよ。ハミ糸ハミあら。うが
ご。あひあまく。ひとくゆ。うひ
神乃おゆく。おゆく。おゆく。おゆく。おゆく。
おゆく。陰陽の神ある。陽神の油。九く。陰神乃油
八く。十く。陰神乃く。おゆく。おゆく。

ゆきとされとハを階數乃様と見。おひくとしもんと
やまとびとよあゆき。神乃主す。ハ神子巫女もり
まゆれもく乃あち。おひく。人と人とも見ゆかくや。アラクせよ
卷向穴師の山の風。ハ。人とも見ゆかくや。

ゆゑをまわるハを隊數乃様とおひくとぞんと
やうびとよめも。神乃まよハ神子巫女も
れもく乃あきめふ。人と人よりかやさうせよ
巻向穴師の山の屋びく。人もゑどりよ山く
させとちり。まく向山穴師山事うの山をとく食
りむき。大和ふ乃石而事り。かづきやをく乃ひ
りひ。ちやおもて山とりよそじひ野
人もえくよ。人もえくもくよ。みくらひもお
事たり。ふき乃か也。山くせきとくは神あまよ
莫辭葛よく家くうひもくもくてゆ也
又ああがれを山くとくよも。ばくうちあく
まくちうり。ば勢乃く。壁のを山くとくよ

あらばよひ長くほんじてありせりよもどり
ゆ山よへ齋すまししかよもすかと紀乃うきはふくう
是をよそに遠大乃被也かよ乃せま紀のかづく乃を付く
よもよへいよあわれ乃あまくとせ。酒ま紀のうき乃
齋よもすかよへ何く。いろいくとあくまくとあつて
事やうがくはうもか一あく。公はにぬあ乃よ
中ひげすを出く。がくはうくとあまうの心を
あくと詠む

みちかくのあまちかまくと歌ひて。あくとようておひしく
みちかくにやうちのかくと畠。くとくとくをりよ
あらのまゆとよひもあくとくよ。めひくと
うふくとておりよ人をりく。めちかくの安を歌ひ

うけにくうやんあらかせ。是をかくくろとくお
みかのうのうのうやく

あ門の枝井乃清れほをまく人へくまびまかく
正門の枝井乃清れほをまくて人のまくと
くまびと。み草へおり。くうあうとせ。是をハトう物
八門の枝のまくとせ。くうあうとせ。是をハトう物
紫井乃水のまくとせ。くうあうとせ。是をハトう物
あまくまくひとせ。くうあうとせ。是をハトう物
三まくまくひとせ

ひふめ乃す

むねめ乃す。天照太神と大ひふめ乃むらとひ
をまくめ也。日神乃は良々とひの事あり

神御事會同焉

つもろと紀とてあまくやひあ乃神とを
よめん

いばくよう鴉をつるん鴉ひづあまく河を乃御とて
新嘗とよひあじきすあゆもあまくとこの朱を
まくねかたゞむち時朱をひらめを云ひおめつまわと
て、を江と丹波よりまつ。新月大嘗会ハ済代乃
ノト免也。清せぬ後だ。望のきかぐら乃奇とつ
是を庵とよ天照大御乃済復句邊のキタリ。
もくはうさ家御大嘗会よ多瀬乃寺也。ミ
カム國の川よ鴉とめてあまくあく新をすよかん
うのくわひの川よ鴉とめてあまくの程あく。お

とくかくとくと、自作の済るとひのくま門よ
とくかくとくと、美能よハ

さひのくわひのくま門よ鴉とめてあまく新をすよ
とあり。けもふよき。まく乃くアヒトモ。方紫の佐佐隈
三ある也。まく乃くアヒトモ。方紫の佐佐隈ひがくま
内へ蔭奥門。隈乃別名とづり。あくまくくすと
りづき。筆乃生もく不也。やぬもひはよ。けさく乃くまれ
新う。神系のひもく乃新と也。大嘗会よ奉をひる
とくくくくう新と。意の新よとありとく
ひおめ乃神ハ日神。日半紀よあまくおやひふ
め乃もちらと。天照大御と。又大嘗会よ稻春
すとく。パシ女がくよ。新。うりあまく。朱ひらきすと

莫念二十
ひおめとよつて。宋ひく女と物をくわゆる
左不審たり

かくともかう

紫葉下生よひうりあくよ以至るくらうて律れき
あくわむともあくうりうゆきあくとく

ま柳をきよめよくうて、む乃ぬよふをもめ乃花を
あはや、代をよくうて、うじと乃ぬよとよ
立ま柳乃花をよくあはく也、日をもほるを
柳乃花の初なり。筆をとじめおれやれど、柳の本にて
もめ乃花をよくせらゆぬわがたまう

かくもひ乃山嘗にせう細谷川乃吉の
ひ歌作の御色のとぞひ乃くのす

まよひかくまび乃中山代篠よめぐれをがまう宮門乃
ちくまのまやくよせゆめと也。彼山乃くをめぐれを細
呑川をぬむ。嘗てのやうじとい。まよひかくとれ。ちやうら

然を以てり。あるゆゑありありあつてしもく
らうとくせりにをまへんがくとみどりをばくして
むりきわらうとあへひあゝ川を細谷川とす。乃勝
をめぐりあれどすよせうとす。古道よ長河流如常
とくへり。あはるよ。

大考乃みきの山乃勞あきを細谷川乃をとのあけき
トシヨアム。おもて平とありすよ。万葉を平城乃御時
尾せざむかう。ほほのうを承。お乃そひのむせ
とあね。うづひもく万葉乃立。伏せびゆゑを
承れ乃御へと。にほ乃御事あり。一様御後りと
御撫ち。大嘗会の時鶴紀主墓のゆき。うき御
おもて絵撫かと云也。或說はてと。人の撫ち處と云也。いふまう

物を年々もとめ。絵撫といひをば。それを生撫とも
思ふ。朱大喜とまつてとも撫ち。二きの山
山と吉傳とまつて。むー。一圓うち今ハニテ。吉傳お
徳中。徳後乃「まう。」一役師べおりんへと。もー
大嘗とがまう。おわん。と。も。じ。も。ふ。け。集。よ。古。へ。と
うれしき。信と云つて。や。おの。乃。匂。を。まつ。ま
き。全。さ。全。乃。精。う。い。ほ。れ。う。通。周。それ。が。も
高。全。と。云。う。て。ご。の。身。ま。り。され。と。も。し。匂。す
じ。ま。う。や

美作やくわ乃。まくはまくはまく。一。万代まで
おひみ尾乃御へ乃。奥さうのく。れ。亨
け。よ。あ。お。ま。万。代。ま。で。よ。あ。ま。と。じ。も。ひ。乃。亨

名のまゝに事ハ居て事たれど。若作よぐれ
もやアとらへあきぞ。ちくはくの道をうまく

行勢集

羨作やくめ乃まひまくかせられ妹が意もまく
けた嘗みの手をかむひきうて。立のうよ徳くら
よおもえられ角

おまくせをうち川を下りて西より走るむ方代までコ
モロミえ室乃御への三日月

軍國乃事の所せが爲の事不外也
子焉よ往之を世人と也 持中納言袍入黒也

長治元年正月
天皇御内書

あらそにあれ乃の酒乃の勢のくふたま
も宿乃の家の物をすみ法くじとく代ハラダ
乃あらそ まともにまざりもある
長濱といひづく
あらそ

あらのや徳の山もかくすとあらわせ
うれき今上乃御へのあらわせ

山をくぐるやうな山のうちてあきらかふ。今までは延
喜乃御事うち一様ほほん。とくに白毫亭のほか
さんとえほん七絃よをくわへんをちよとめり。

卷之六

あつまつてとよむべ。ぢりまあるひいづくやふてゆ
みちわくす

多國乃テ故あらそあ神樂乃外もう
あらまよ當ニテモうるぬとし君と巴屋じもそハシギ
西山川又雪ももちらくふれのゆねとを
君をぞ居く。までをあらう乃ち見つゝとあく
まはきるよもくへあらすゞ。といゆくと
三経也。せんじもくはまかと方ちうもどかくも
みち乃くはいはく。あらと塩釜の浦、こゑのつまくちり
乃ちかくさいはくもかかねど塩竈のうみあぐすま
はちくをかくわく。おもてくわくまくまくまく
じきくもハ面白くもまやうの経。がくあく。そちの

くはいはくもあぢれど。おひ風乃浦あぐゑのつまく。
う御ちふ。城よ燃^{えん}殿乃く。ひすいあく。面白
かうともやう乃浦。頬照淡。みちかくのゆく。そ
そく乃浦。よつまく。お一たかばく。おきくあれ
ど。塩竈の浦。ごく。毎のあまき海をやうぢく。ら
らうや。はれよしごく。まやハあく。どく
う。乃浦をまびうけられあり。お市ねえちれく。い
ざくりく。あやしく面白く。おからまく
おがみどちすく。乃中に。おが海と。ひとえよ
みる。おまくらう。まねをなさん。おまくらう。

あをを參て

鹽竈よりまかん御殿にあひあかくまえ

とくわう

おさとを教へやうて鹽竈乃きが神のまつを教へ
お乃きせことを教へやうてあまを徳りあり まつよ
とくわう 乃神のねようそへ徳りをそくそ支の立
一立也 あやめ乃神の仲よ難能あり。ひせ

すりそよむ

をくみだらう乃小鷦の人あひ卦乃ほとふりとじをまき
小黒房あひと小鷦いはまも面向てあちれをけ鷦乃
人よきあくまくふ教へのがほとよしとひひき
まくまくふめりあひろじふを教乃ひぬ人よき

よだりおりふ乃いほくしりき歩くすやう
小黒房と云ふよる豆小鷦はあひ。ほくくは立産
美葉すへ墨衣とあ。思含あくまくち立産をこもてあう
て。人よかくもむくあくまくして。げぶれりろまよかく
教乃家ほとよせむやとせ。伊御よけ秀乃ひおり
えれをうううて

くらむら乃あまのね乃人きく教乃走ふいとひま
とひまくおとねをうね人よかくてさそりうくとく人き
む。いとくもきく物をとせ

みくみひきとやせまみ城野乃あらむあくあくま
御角はまくわく努力とりせ。あやま乃あらむ
あらむかくまあるとせ。ま城野を林もおりく霧

立あひて西うら。笠ふは乃役う。兩うりも處乃海
さうかくにあうばのふれをみ乃まわれとうが
ど。宮城聖き西乃山陰すく處の立あひ
とらはう

立川のわざくまのひまくあくにけ月をち
寂じあまくみ乃をやうれを。那ううのがうの
ほううゆのがれをなりやうで。くうりくまを
づのうふのびれをあくをいあくよふよおていま
とく。あうありんとうせは月をうりぞ。いあくあう
さく。いあくあうばくらんじく縮つまうゆと
いあくすく。け自をうりとひうへあや。めのうらと
きくがくく云謬後也。立川乃よ字濁タマシタハアリ

一 横け後う。けうけ身だうとすと捨毛がう。決
乃うとふふ皆玉ねりだうとつう如何

馬糞をうてあくをうとまくとまくとまくとまくと
まくとまくとまくとまくとまくとまくとまくと
もあくとまくとまくとまくとまくとまくとまくと
人のううううううう。あくへん。他へう。けう。けう。そ
男かよ東のをうとまくとまくとまくとまくとまくと
ぞ玉くとまくとまくとまくとまくとまくとまくと
人のううううう。あくへん。他へう。けう。けう。そ
ううううう。あくへん。他へう。けう。けう。そ
くもまだ事をねじふとよあたまのうがまえ

は。まことにちがひ事あり。結局
寺社より本乃雲中の松來の雲とて二三
とくづき。さむれども山のゆゑ。本乃松とぞうりともく
あ教源氏よきもく

近頃は日本でも、東の風も西北風ともいふ
をみる事ハ寡少なり事也

卷之三

あうぎ乃様立ちて。いそまむじやも。めまき津よあれ源
に。うちきのひが。小織後成。わ模。こうちかたく。いそまむじや乃。べ。遙
立ち。津よおれ源と。様。蒙る。あ。藻。も。と。り。よ。源。乃
あ。ち。や。も。と。ど。り。を。お。れ。と。源。を。い。ふ。成。も。ち。ち
う。い。あ。つ。ち。わ。た。ま。せ。め。う。一。行。よ。あ。ま。り。は

もくもくて。あくらいとおれのやうをす。物也よ。清高
やうじわめかひきく。やうじ。和琴を一刀みてさへ。さうて
とれをやがくと云ふ。又あまの破繻あくとて。和琴あめり
そちどうち入ふ。籠をひくと。繫小女事。放を行ふ。まこと
じう。かう乃す。活風乃風俗をくわむ。まこと
儀もまか行ひ哥

竹川乃ちのほめなうゑもそのよ、秋をもはまく
や。さわをがほまくてもややまく、あまくてもやのまく
とくよをましもまくや。じとうをまく
まみゆ乃ちごみゆはまく、あまくまくやまく
とあるもまくまくやまく。かくよ

物食ふをめ乃満^ミすあがまもがえりあきにあひさあひよきう

玉乃めさすハ廻^{アヤマシ}内廻^{アヤマシ}。是モ女事也。

ひくら五

はくをね乃^{アシ}たまふ事^{アシ}あれど君^{アシ}は新^{アシ}よまて山^{アシ}は
荒波根^{アシ}のこきこありてきありてよだきあれど、
君^{アシ}のひろき御^{アシ}めぐみ乃^{アシ}新^{アシ}よまきげそた^{アシ}是
ばくをね^{アシ}荒波山^{アシ}。常陰玉乃^{アシ}あの方^{アシ}ある
山^{アシ}。極東^{アシ}あ^{アシ}乃^{アシ}開^{アシ}うある山^{アシ}。是
皆^{アシ}ももき^{アシ}聖^{アシ}。おうざ^{アシ}もかくわよ。ひくら乃^{アシ}西^{アシ}
はくをね^{アシ}よがい^{アシ}うて。おほ涼^{アシ}くわく^{アシ}。りんれぞ
るや。だらの^{アシ}山^{アシ}。このもみも^{アシ}はげ面^{アシ}被^{アシ}面^{アシ}。う
づくまよかざると^{アシ}後^{アシ}ハ邊^{アシ}。源氏^{アシ}よ^{アシ}れもれ
毛^{アシ}紫^{アシ}争^{アシ}ひ人^{アシ}と^{アシ}。君^{アシ}御^{アシ}おひぐる^{アシ}。

管^{アシ}集序^{アシ}。あまゆ^{アシ}。御^{アシ}はく^{アシ}。かのたみ
倒^{アシ}。そのかずでなづれ。ひくら^{アシ}。めぐみ乃^{アシ}。ばく
を^{アシ}。乃^{アシ}はくらも^{アシ}。くわく^{アシ}。かー^{アシ}。て^{アシ}。あく
毛^{アシ}。序^{アシ}。仁流^{アシ}。枯津^{アシ}。う。御^{アシ}惠^{アシ}茂^{アシ}。荒波^{アシ}
陰^{アシ}。とかく^{アシ}。同^{アシ}。す。づく^{アシ}。の。はくら^{アシ}。お家^{アシ}。なう
室^{アシ}。いづき。モ^{アシ}。眺^{アシ}。殊^{アシ}。勝^{アシ}。乃^{アシ}。氣^{アシ}。き^{アシ}。が^{アシ}。お^{アシ}。氣^{アシ}
毛^{アシ}。かひ^{アシ}。御^{アシ}。はくら^{アシ}。

はくら乃^{アシ}事^{アシ}の。ひくら^{アシ}。おもて^{アシ}。ぬも^{アシ}。て^{アシ}
はくら^{アシ}。の。う。乃^{アシ}。みち。も^{アシ}。おも^{アシ}。つ。う。て^{アシ}。おも^{アシ}
う。おも^{アシ}。を^{アシ}。ち。く。う。^{アシ}。と^{アシ}。せ

かひ^{アシ}

山をもとやの中へまくすとて。山をもとやの中へまくす
えりとどえ。まくすくは。ひよくちう。あきなう
甲斐乃玉の風俗よ。うちくはれあくとふ。ふと
アキをもとやの中へまくすとて。後あき」と。まくすやの都よ
まくすくは。ほがよあくと。よこはまくすくがまく
かもあき。ぐやまもあかねむ。同一視する。西をそ
去佐内能よ。かくてさーのびよ。自活能。東の方よ。山乃
よことわらをとて人よども。やまとのま。いのま
。古今の撰者。山のトクニキヤウをとてとく。いのまを
里。山野がとりよまくまくす。やの中。山をは。山
佐和那。あき。やの中。山をは。山をは。

中山を長じといふ。中山と通す。よもよとくみ。し

孫の秀乃風俗あり

かじゆをねう。山あ。嘆風を今もや。とくとく。あく
じゆの嘆風を。山あ。嘆風。とくとく。も。か。那。能
ことくをあやんちや。ねう。山う。き。能。あえ。山
あえ。あく風。を。とく。能。とく。あ。山の。能。石。あ。う。人。ハ
石。あ。う。日。能。を。て。ゆ。よ。風。ハ。あ。う。よ。山。能
り。能。あ。う。あ。え。ゆ。あ。う。や。あ。う。能。と。能。乃
人。よい。ひ。あ。う。と。や

佐勢亭

望乃浦。すえ。す。あ。ひ。き。お。お。ぢ。り。あ。う。空。む。ね。く。と。足
お。の。う。よ。行。ね。じ。一。お。ひ。ひ。ち。る。能。の。じ。く。よ。お。り。す

草書
六
あらもあらば。人をかくはをやと詠ひて
いさぎ乃そうや。あらもあらばどもといちんとく。
あらもあらをいひきり。麻ま浦を西磨みよえ。奇宮
乃御をすまく。がふを執じるふきり。併勢とあたと
ひとよめり。があき乃あくとくす。麻生ともちか
よ。梯麻乃麻生とづくれ也。さくあくとくの梯乃
あくとくに梯よ。岐麻あく。岐志磨あく。岐磨あ
地不よき

そのが筆參乃まゝの事

其の原と
ゆゑの野花

葛原や
中川の
代姫より
おまきう

賀長乃屋へうれしめ。本山の内より、詔書を附もどして
むる也。是れハ寛平乃御時も、すりて賀長乃源時
家事也。時敏行内侍にしき家の衆人よもうちうづ時よ
とあり。至ちきり。袖頭さくとうよけをあめく事。一
匁の手也。後康公也。あむく。経古今第一乃
予仙也。がくふかまく。今第一乃予と云う。首の
かみを。又云え。從久也。乃源時の家のみ。十一月半
日也。寛平御代乃も。やめ。由來承下りてあれを據め候
。主始乃主。東北の事とてめまれも。五事也。

家く捕院本うかに書入以墨滅焉今別とす

卷第十 猫名郎

ひぐる

ほくゆ記

松人をまよひて一薙門乃山のやうにいふらむじやう

左郭へ下をばよ

絹に

かうりてまちふくらむのまてもやくんくわが身とさうか一猫と

きうたまのま友則下

つゆ記

あ一時とゑへくわれどタ、これ乃おりおもよめでとまくる郎

みにま 利貞下

をまわぬ まやこーぬ

まや 小町

まやまわぬてまやくわくうむかまやだまやとまやのまや連う

まやへ下

まやとれ まや

あやゆら

あやゆらまわぬとれまやくわくうむのあやゆら山乃あるとふ
ひまやひあらおれまとのそめとねうちらもくへつう
まやくわくうむにしゆ

桂子下

卷第十一

あくひ乃もまよひのまのまくわくうむ下

まやをまよひまよひのまのまくわくうむ下

日ももこすあすかの月もとよむにわが心もとよむ

卷第十三

立くいきよのせ思へはるの下

おも乃とれすありふくら門のまとあくよもおもむくま
はあさあくへひめみとのあく乃うめめくら

をくうゆあたあてまつま

坐すれまゆ組乃のきのまくまほんのまくくまほひや

卷第十四

あすかよとおとおとあおと下

うとおりひめひくらあくみと、城くらまうて
我そこうくま、トシムテ、かのくもあくまひもとまくも

深窓の父翁」とハあうちもあくま幸たん下

七言歌二十二

名ももくすあすかの月もとよむにわが心もとよむ

紀淑望

紀淑望
聖子

支和歌者，施其根於心地，發其花於詞林者也。人之在世，不能無爲。因慮易遷，哀樂相變，感生於志，詠形言是，以逸者其辯，集心者其岑懨。可以述懷，可以發憤，動天地，感鬼神，化人倫，和夫婦，莫宜於和歌。有六義：一曰風，二曰賦，三曰比，四曰興，五曰雅，六曰頌。若支春寫之，轉花中秋，蟬之吟樹上，雖無曲折，各發奇淫，物皆有之，自然之理也。然而神世七代時，質人淳情，欲無以和乎，亦作遠于素焉。鳥尊到出雲國始有三十一字，而詠今文，又予之作也。其後雖天神之孫，海童之女，莫不以和。

奇，通情者也。爰及人代，此風大興。長短短歌，旋頭混本之類，雜駢非一。源流漸滋，譬猶拂雲之樹，生肩寸亩之烟，浮天之波，起於一滴之露，至如難波津之什獻，天皇富緒河之萬報太子，或事開神異，或真入幽玄。但見上古歌多存古質之格，未有耳目之觀，徒為教誡之端。古天子每良辰，羨景詔侍臣，預宴遊者獻和歌，君臣之情，由斯可見。賢愚之性，於是相分，所以隨耳之歌，擇士之才也。自太津皇子之初，作詩賦，詞人才子慕風，繼塵移彼漢家之字化，我日本域之俗，業一改。和歌漸衰，然尚有先師梓木大夫者，高振神妙之思，獨步古今。

間有山邊赤人者並和亭仙也其餘業和亭者綿々不及彼時更浸漓人貴奢淫淳洞雲與巒流泉涌其實皆落其花孤榮至有好色之家以此為花鳥使乞食之客以此為活計之媒故半為婦人之右難進大丈之弟近代存古風者終二三人而已然長短不同論以可辨花山僧正尤得弄之雖然其詞花而少實如圖畫好女徒動人情在原中將之耳其情有餘其詞不足如姜七之者鮮衣寧治山僧撫喜其詞花麗而首尾渟滯如望秋月遇曉雲小野小町之亭古衣通峨之流也然魁面

無氣力如病婦之著花粉大交黑主之亭古猿丸大夫之次也頗有逸真而躰甚鄙如田夫之息在前也此亦氏姓流聞者不可勝數其大底皆以雖為基不知亭之執者也俗人乘事榮利不消詠和亭悲哉或々々雖貴相將富餘金錢而骨未腐於云中名先滅於世上適為後世被知者唯和奇之人而已何者語近人耳義懷神明也昔平城天子詔侍郎令撰之集自不以來時歷十代數過百年之後和平寺不被株連雖風流如野寧相輕情如鑿在納言而皆以他才聞不以所道顯陞下御宇于今九載仁流秋津洲之外蕙茂澮波山之陰

夏為瀨ナリ之辨寂サキトドカ之用シテ砂長ヨタ為巖ト之頌洋ヨト之滿ツ耳思ヒラ
既絕名之風欲ヲス魚久廢ヨクホウ之名宦沼モコトハシ大内記紀オカニ友則御書所
預紀貫シテ希シテ甲斐少サツシ目凡シテ汀肉躬恒右衛門府生士生
忠岑ミタケ上エラ獻家集ミツカ并古來回シテ尋曰續万葉集ミツカ於是重宥沼
部類シテ所奉シテ寺勤チリ為二十卷ミツカ名曰古今和琴集ミツカ長等詞
少春花シテ之艷名竊秋シテ之夜シテ長次哉進恐時俗シテ嘲退
慙才藝シテ拙適遇和琴シテ之中與以樂吾名シテ再唱嗟平
人丸既沒和琴不在シテ辛平シテ卒于時延喜己年歲次ヤル壬午シテ四
月五日シテ卡貫シテ等謹序シテ

此集家之所稱雖說之少且任師說又加了見為滿後學之究本不顧老眼之不堪半自書之

後學之究本不顧老眼之不堪半自書之

事謂道之魔姓不可用之但如此用捨只可隨其身之而存不可存自他之毫別志同者可隨之

貞應二年七月廿二日 辛亥戶部尚書藤原判

丁為將來之根本

本云
ば本以西亦お傳え本校合え
わまく不重合本一の往來也

高麗井榮雅自筆與遺

從三位立判

昭應院御白日

右に右を集え清玄一家亂入え時住宅を上う百段
瓦火被成烟陰然大方端を覺えふ古集え平以至次
室あつ僻案抄え說本每一條禪周御從士とおは古
みあ大僧正玄統内々古今の事は古傳文え中古を表
餘日御他界て後名斷えずよし不忘思えは召サと
即指南えが南家え古說因心え而もと云加委也
折け傳受え矣志於志願傳受也 治軍家高麗井雅親御謹尺え
左立え寔不為立折述水就祐松老翁又かむえ同望
き、望國陸乞様情強而詔望え象以は古本今傳文考
也末代え室寶の白絵の生絵志也は集等義く要也

多々不滿一々不恆之也。它うを誤事也。又はかく之
表紙位支摺也。是又於世有未著有物也。首志不因於
貌末々摺宣自麻事於為私主す也。跋あえ物ふ用丹
吉の堂板也。け摺う。夏伊勢物語滿集え志に於體
ひう詠焉も沙汰る也。そ恩比丘年七十以不見え
老眼本う落字云誤ホ一従う時の至う唯是顯けを
モニう志老筆見若發而已。

永祿四年二月十八日玄果平

雅世

雅親 雅俊

御家系圖畧々三代記々

親祐 玉信

